

ゲンさん

鈴木京子

大型連休の後半からサツキ（田植え）が始まった。トオルさんちに二日、続けてエイジさんちに六日。三日空けてまたエイジさんちの無農薬を植えに二日。それで今年の田植えは終了だ。

ちょうどエイジさんの前半が終わるころ、ゲンさんから電話が来る。「オレは終わったよお」。

ゲンさんは、鳥海山の麓の「白井新田」と呼ばれる地区で暮らしている。白井新田は、庄内藩が藩校致道館ちどうかんを開設（一八〇五年）するための資金源（学田）として、白井矢太夫により拓かれた。海拔二〇〇メートルくらいの、絵に描いたような「中山間地」の段々田んぼは、六条植えの田植機で二往復もすれば、また一段上下して移動しなければならぬ。八条植えで四、五回も往復し、一往復に七、八分かかるエイジさんの田んぼとはまるで条件が違う。同じ「鳥海山麓」でも海拔二〇メートルくらいの私の家から見上げると、ゲンさんのうちはまるで鳥海山の一部に見える。

子どものいないゲンさんは、父親を見送った後は連れ合いのヒロコさんと二人でコメづくりをしてきた。でも、数年前から病のためヒロコさんは田んぼに出られなくなった。ゲンさんは、種まきや田植えなど複数の男手が必要な時はシルバー人材センターに派遣を頼むが、土詰めやソネ洗いなど、女手ひとつで良い時は私を呼ぶ。シルバー人材センターが「女性の安全のために」女性一人だけの派遣をしてくれないからだ。このことでゲンさんは以前とても嫌な思いをした。

シルバーに限らず、女性と男性では手間賃が違う。ゲンさんのような家族農業規模では軽作業に男の手間賃を払うのは痛い。ゲンさんがシルバー人材センターに「女性一人」の派遣を強く要望したら、「エロじじい」呼ばわりされたのだ。さらに、シルバー人材センターは三時間とか半日とか「かった時間だけ」の支払いを嫌がる。

「かっちゃん（私のこと）みたいにちょっと助けてくれる人がいればよお、オレみでえ年寄りだったまだまだコメつくれるんだ。去年のコメ、もう全部売れましたヨ。冷蔵庫、何もないヨ」。とくに、中山間地適応品種（平坦地では高温で品質低下）の「里のゆき」は遠く愛知から引き合いがあったのだと、ゲンさんは自慢する。

ガタゴト、バシヤバシヤとひたすらソネを洗う私の周りで、ゲンさんはわら束を燻いぶして虫除けにしながら、木製のソネを運び、釘を打ち直して修理し、十字に積み上げていく。

帰り際、七五〇円掛ける八時間分の手間賃と領収書を交換した後で、ゲンさんは「これ、お父さ



一番奥に黒く見えるのが砂丘の松林。その向こうは日本海。



ゲンさんは部落の簡易水道のポンプ小屋の管理者も務める。この水道は鳥海山の湧水100%。「年寄り」で先が長くない」という意味でゲンさんはよく「よしでかわら」という言葉を使うが、まだ意味がわからない。



鳥海山の頂上が近い！

ん（私の連れ合いのこと）と何か食べてくれ」と、財布から一〇〇〇円札を差し出した。有り難くいただくかわりに領収書を書き替えさせてほしいと言うと、ゲンさんはちよつと照れくさそうだった。